民俗資料館だより

第11号 2004. 3. 31

発 行 加茂市民俗資料館 住 所 加茂市大字加茂229-1

電 話 0256-52-0089

FAX 0256-52-0089

加茂の特色が生かされた常設展示

加茂市民俗資料館長 中 滝 孝 明

民俗資料館が下条地区から加茂山公園内に移転開館して、今年の11月でちょうど10年になります。この間、多くの皆様から当館をご利用いただきまして有り難うございます。

さて、加茂郷土調査研究会発行の加茂郷土誌第13号に「歴史をつなぐ子供たちへ」という詩が掲載されています。その詩には「――子供たちよ 君たちは知っているか? 何千年も前に生きた我々の祖先が 食物を煮炊きした土器のかけら それを手にし 彼らの生活を想うときの驚き」という一節があります。この詩が掲載されてから16年あまりが経過しましたが、その間、加茂市でも新たな遺跡発掘調査により多くの土器や石器が出土されています。

これらの土器や石器を含め、当館には現在、約20,000点の収蔵品があります。館内には、そのうち約1,200点を常時展示しております。展示品は、これら出土品のほか、加茂の祭り、歴史、古文書などから、建具の製造工程や木工の特産品、漢方薬の製造器具、加茂縞の機織り機、陣ケ峰瓦、紙すき用具など、加茂の特色を生かした、しかもいずれも日常では見る機会のほとんどない貴重な資料ばかりとなっています。どうか、皆様方におかれましては、お気軽にご来館いただき、加茂の歴史に思いを馳せていただきたいと存じます。

加茂の文化財紹介

黒水 日吉神社 格天井絵 勝山画





宮寄上の鉛鉱山と加茂商人

加茂市文化財調査審議会委員 長谷川 昭 一

宮寄上の小乙川の上流には、廃鉱になった鉱道・選鉱場・選鉱した後のズリ(鉱石屑)を積み上げた場所などがあちこちに残り、かつての鉛鉱山の繁栄の跡をとどめている。

宮寄上村で鉛の鉱脈が発見されたのは、江戸時代後期、安永8 (1879) 年ころで、宮寄上村の長左衛門と下田郷森町村の甚内という者であったと言われている。

宮寄上村内での鉱山の試掘を村松藩が承認したものだが、はっきりした場所については明らかではない。

初めは村松町の酒屋小八という商人が村松藩の許可をうけて鉛山の経営を請け負っていたが、寛政9(1797)年に地元の農民といざこざをおこし炭や薪などの購入を止められて、手を引いた。その後、三条町倉田屋七之助・村松町扇屋儀右衛門らが経営を引きついだことが知られている。

文化12 (1815) 年におきた「袖山出入」といわれる七谷郷と川内郷 (現村松町) との仙見川 上流地域の山地をめぐる境界争いに七谷側が勝訴してからは、為之亟・儀兵衛・九蔵・藤蔵・ 新左衛門ら農民によって続々と新しい鉱山が発見された。

彼らは経営にも進出していった。宮寄上の鉛鉱山は生産量の増加により、村松藩のドル箱的存在にのし上がり、底をついていた村松藩の財政再建の一助となった。その功により宮寄上村の村役人たちは村松藩からいろいろな恩賞を与えられた。

文化10 (1822) 年、鉛山世話役の新左衛門は肝煎格、同じく儀兵衛は組頭格に昇進、その後、 儀兵衛は鉛山肝煎に任命されている。

弘化5 (1814) 年には為左衛門と藤蔵が組頭 格に昇進、儀兵衛が給米二斗の支給を受けた。

鉛鉱山がもっとも盛んだったのは、安政2 (1855) 年のころで、2年間で7,500貫の鉛産出高をほこったという。

鉱山で働く金子(坑夫)には近郷ばかりではなく村松藩領外からも大ぜい集まってきた。これ等を相手にする小売酒屋ができ、昼間から酒や料理を出すという賑わいであった。宮寄上村の小売酒屋は、嘉永6(1849)年の調べでは弥七・政八・藤四郎・幸治郎・喜之助・喜太郎の6軒を数え、七谷郷では一番多かった。

宮寄上村の鉱山師は多くの金子を抱えて地元の鉱山にとどまらず他領までにその技術の高さは知れ渡っていた。天保15(1844)年7月、大白川新田(現入広瀬村)の大栃山の山師総代が



鉛山(加茂市史下巻466ページ)



加茂の商人が取扱った佐渡御用鉛は信濃川 を下り佐渡に運ばれた。その船に立てられ た鉛の旗(加茂民俗資料館蔵)

幕府に収める鉛3,000貫の地元相場を当時嶽の山 師と言われていた宮寄上村の為左衛門と為之亟に 問い合わせ、それに対して「吹鉛売両二付直段三 貫四百五十匁」と答えた文書が残っている。

(浅井賢三家所蔵『入広瀬の近世』)

ここで産出された鉛は、加茂町の倉間屋治平・ 紙屋虎吉・若狭屋(小柳)喜助・丸川屋(小林) 松之亟・三条の吉井屋乙吉などの商人を通して、 御用鉛として佐渡の金山に送られ金の精錬に用い られたほか、女性用のお白粉や鉄砲玉の原料とし 需要が急増していた。

加茂市民俗資料館に展示されている「佐渡・御 用鉛」の旗は、鉛運搬船に立てて加茂川・信濃川 を下ったものであろう。

加茂町の商人、若狭屋と松川屋は宮寄上の鉛だけでなく、広く県下各地の鉛の流通にたずさわっていたとみられる。天保12(1841)年に若狭屋が大白川新田の鉛1,500貫を佐渡御用鉛として、さらに江戸の鉛問屋十郎兵衛他に290貫の鉛を売っ

ている。若狭屋喜助は、文化・文政時代に加茂町に屋敷を持ち、十日町の織物問屋である加賀屋との取引があり、毛織物や白縮の取引をする織物商人であったが七谷郷の宮寄上の鉛山が開発され佐渡御用鉛の納入や江戸の鉛問屋との取引きを深めたと思われる。(「加茂郷土史」15)

丸川屋松之亟は、天保15 (1844) 年12月大白川や小出の鉛を佐州御用達として買い入れていた。先祖は(小林) 彦兵衛といい越前(福井県)の出身で屋号を越前屋と名乗っている。4代彦作の代(宝暦3年沿) に穀町に移り、松之亟の倅の代に松川屋に改めたという。

(関正平氏調査・小林昭郎氏所蔵「小林家過去帳」)

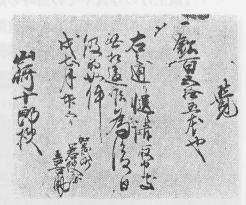
宮寄上の鉛鉱山は明治に入り、出鉱量が減少するとともに鉛価格の下落が追いうちをかけ、 程なく衰退していった。

加茂町の鉛商人たちも鉛の流通から撤退していったものと考えられる。

しかし、宮寄上の鉱山技術者の伝統は県内各地の鉱山 でその腕を発揮していた。

大正 7 (1921) 年七谷村宮寄上の金山師の親方として、 安中輝蔵・小柳政助・中野鹿蔵・中野太郎・佐藤熊太郎・小柳慶次郎・安中儀三郎らの名前が見える。

(「自坑夫取立面状」)



加茂町若狭屋運上鉛受け取り覚 (加茂市史下巻466ページ)

民俗資料館 平成15年度の歩み

1. 入 館 者 数

平成15年4月

平成16年3月

中共日间 中接面國質	市内	市外	計	団体
大 人	198	831	1,029	7
小中学校	538	206	744	15
計	736	1,037	1,773	22

2. 資料収集の状況

本年度は6名の方から7件11点のご寄贈賜り御礼申し上げ、紹介させていただきます。こ の他に自作の玩具類・書籍類が多数寄贈されてます。

〈寄贈・寄託品名〉

- ・第一回支那事変特別国庫債券 ・る号三分半利国庫債券 ・つ号三分半利国庫債券

- ・柳こおり ・ 冬用帽子付きマント ・ 二重鳶インパネス
- ·市場標柱

- ・五十円銭升 ・十円銭升 ・秣切り (マグサキリ)
- ·黒塗膳

- ・(故) 田村喜徳氏蔵書類多数・(故) 田村喜徳氏手造り玩具類多数

〈寄贈者ご芳名〉

- · 塩谷 哲男 氏 · 北沢仁太郎 氏 · 田村 幸代 様
- · 近藤 徳一 氏 · 梅口 智明 氏 · 大塚 勇松 氏

3. レファレンス・サービス及びアンケート調査(民俗資料館への問い合わせ)

レファレンス44件、アンケート・調査13件

①レファレンス・サービス

- ・「加茂の縄文時代の遺跡について」
 - ・「青海神社、長瀬神社の祭札について」
- ・「岡の町出土の古銭について」
- ・「加茂縞とその色模様の特徴について」
 - 「凧上げの写真やその当時の凧に関する写真について」
 - ・「長崎に明治10年ころの宣教師によるマカロニの記録がありますが、加茂のマカロニに 関する資料の詳細についてお知らせください
 - ・「加茂祭の御神幸の中の傘鉾の由来について」
 - ・「東又新田と呼ばれるところは何処を指すのか」 その他

②アンケート・調査

- ・にいがた バリアフリー ガイドマップに係る調査
- ・健康増進法の施行に伴う受動喫煙の防止について
- ・メディア リサーチ センター「民俗資料館だより」データ提供
- ・平成15年度文化財保護強調週間 行事等実施報告書 その他

4. 館 外 活 動

①古文書講座

今年度も顔なじみの方や始めての方、多数の方々のご参加をいただきました。 熱心な勉強会、ご苦労さまでした。受講者延べ182名

- ○日時 9月2日 9月9日 9月16日 9月30日 10月7日 各火曜日 午後7時~午後8時30分
- ○会場 加茂市民体育館内 公民館 第1研修室
- ○講師 加茂市文化財調査審議委員 関 正平 長谷川昭一 丸山朝雄 溝口敏麿 佐藤賢次 各氏
- ○内容 共通テーマ『江戸時代の暮らし』
 - 第1回 「手習いの手本」 溝口 敏麿 氏
 - ・文字の「読み・書き」出来ることが知的広がり、深まりである。
 - ・日常生活での人間同志のかかわり合いに必要な文字。
 - ・いろはに~えひもせすん 酒代 米代 茶代 御布施 金銀銭
 - ・互いの連絡 姓名に多用されるもの 地名 固有名詞 等々を手本とした。
 - 第2回 「近世―下条地区の支配を考える」 佐藤 賢次 氏
 - ・下条、天神林の支配変遷について一下条村は中村・東村・西村の三組に分けられ、 天神林村は下村・上村の二組に分けられた。
 - ・慶長三年より新発田藩溝口氏領、のち分家溝口氏知行所、幕府直轄領などとなっていた。
 - ・寛政九年ころ、下条村の生活が困窮に関連し、質素倹約の達しが役所から出た。

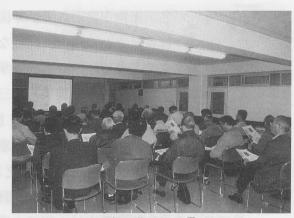
第3回 「加茂町の秤座について」 関 正平氏

- ・天ケ沢新田の真柄仁兵衛が江戸の秤座守随彦太郎での修行を終え、文政六年に加茂 町に秤座を開設する。(市川浩一郎家文書)
- ・慶応四年に加茂町秤役所の真柄八郎左衛門が官軍に秤役所の謂われや秤改め時のや り方等を届け、以後も業務の継続を願い出ている。
- 第4回 「村松藩七谷組の年貢米売り渡し」山崎家文書 長谷川昭一 氏
 - ・約束の年貢米を収めることが出来ない場合には、庄屋、村役人、組頭の責任で収めた。
 - ・米以外の産物を年貢米の代わりに収めた。和紙等

第5回 「後須田村北潟の水争い」

丸山 朝雄 氏

- ・鵜森組一後須田村北潟村縄手出入熟談 済口証文の文書を解読しながら当時の 水争いの様子を具体的に話す。
- ・水は百姓にとっては死活問題である。
- ・その水争いも当事者同志には一定のル ールがあり、解決に至らないときには 庄屋、組頭等が仲介に入り決着させた。



聴講風景

② 歷史講演会

現代では想像もできない、新発田の『殿様』に「御目見」(おめみえ)することの大変さ、 さらに、単独謁見の「独御礼」(ひとりおんれい)は緊張の極みに達したのでは。聴講者55名

- ○日時 11月8日(土) 午後2時~午後4時
- ○会場 加茂市民体育館内 公民館 第4研修室
- ○講師 加茂市文化財調查審議委員 関 正平氏
- ○演題 「上条の庄屋と新発田の殿様」
 - ・上条村の肝煎・名主と中沢家初代上条村名主 太郎兵衛
- ·新発田藩主—溝口秀勝~十二代溝口直正
- ・寛政上知と新発田藩の御目見格 幕府領庄屋に御目見格付与一上条村名主 中沢太郎兵衛 関



- ・文化十二年九月 上条村庄屋中沢太郎兵衛の御礼登日記―御目見に至るまでの経過、 御目見当日、新発田藩主への独御礼の様子
 - ・その後―御礼の祝宴―郡奉行に土産―水原代官所に挨拶―上条村帰着

③ 特別歴史講演会

講師は、高校生・大学生の教育に熟練され、更に新潟県史編さんに携わられた斯界の第 一人者である。聴講出来たこと、貴重な機会に感謝。聴講者53名

- ○日時 16年3月13日仕) 午後2時~午後4時
 - ○会場 加茂市文化会館 小ホール
- ○講師 郷土史家 井上 慶隆 氏
- ○演題 「近世越後の庶民文化」―近代日本を生み出した教育と学芸―
 - ◎教育 ①日本人の意識─邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す。
- ②外国人の眼―ペルリ、ハインリッヒ・シュリーマン、メーチニコフ 日本の教育の普及率・識字率の高さ(男女区別無く)は他に類を見ない。
 - ③越後の寺子屋―巻町願正寺聞理の日記・中頸城清里村馬屋専福寺僧淨の日記
 - ④寺小屋の実情―机の配置(個人の進度を尊重)

手本(木版本一『越後往来』明治八年作成、地 名・産物が書かれていて国語・書道・社会科の教 科書を兼ねていた。高度な学問であった。

- ⑤学塾での研学―日本的儒学の形成 古川茂陵 他
- ◎学芸 ①文芸—「北越三雅集」詩三名、歌十二名、句八名 一神龍編「北越古今詩選 | 加茂人十二名 含まれる。
 - ②医家の系譜と交際―竹山家・森田家・入沢家 (『香山竹山屯先生追憶之栞』によって作製) 井上 慶隆 氏



一竹山亨(五代目祐ト)日記に母親の実家(加茂)のことが書かれている。

◎近代への指向 藍澤南城―実証主義者「南城山人三余集」九

加茂市の遺跡 平成15年遺跡発掘調査について

加茂市教育委員会社会教育課主查 伊 藤 秀 和

本年の遺跡調査は、学術調査が3遺跡、開発事業に関連した試掘・確認調査が8遺跡を対象 に行われた。

1. 丸山遺跡 —旧石器時代—

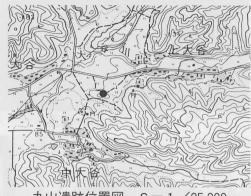
所 在 地 加茂市大字上大谷字中道

調 查 面 積 約142 m²

調査期間 平成15年9月2目~9月25日

調査原因 公園整備計画に伴う学術調査

調査の概要 昨年の調査成果を踏まえ、遺跡の範囲を明 確にすることを目的に段丘上全域を対象に23ケ所のトレ ンチを設定した。概ね石器は段丘全域から出土し、遺跡



丸山遺跡位置図

の範囲を確認できた。また、段丘最高所地点にある18トレンチにて石器集中地点を検出した。 採集及び出土した石器は約140点程で、彫刻刀形石器、彫器削片、石刃、石核、剥片などがあ り、昨年出土した石器群と同様な内容である。



丸山遺跡調査風景



丸山遺跡石器出土状況

2. 宮ノ浦古墳(通称熊野山)・福島古墳群 一古墳時代—

所 在 地 加茂市大字下条字大滝、十万谷

調 査 面 積 約47 m²

調 查 期 間 平成15年11月29日~平成16年1月26日

調査原因 市史編纂事業に伴う学術調査

調査の概要 古墳の規模、形、構築年代を明らかにする ことを目的に測量調査及び確認調査を実施した。宮ノ浦 古墳は丘陵最高所に単独で立地する直径約20m程の円墳 と見られる。3ケ所のトレンチから周溝が検出された。



古墳群位置図

また、古式土師器が数点出土し、概ね古墳前期(4世紀)頃の首長墓と考えられる。福島古 墳群は宮ノ浦古墳と谷ひとつ隔てた丘陵上に立地し、1~5号墳の5基で構成されている。や はりいずれも円墳と見られ、直径15~20m前後の大きさである。3号、4号墳において周溝を

確認した。出土遺物はない。宮ノ浦古墳、福島古墳群ともに見晴らしのよい場所を選んで造られており、眼下に存在する集落を意識した奥津城であったことが知られる。



宮ノ浦古墳 墳丘



宮ノ浦古墳 周溝



福島2号墳 墳丘



福島3号墳 周溝

3. 開発に伴う市内遺跡試掘・確認調査

ほ場整備事業に伴い下条地区の西吉津川遺跡、馬越遺跡、太田遺跡、高柳地区の城下遺跡、 寺下遺跡、伝下屋敷館跡、宅地造成事業に伴い下条地区の中沢遺跡、林道拡幅工事に伴い上条 地区の割沢遺跡が調査された。調査は平成15年6月~16年3月までで合計104トレンチ、約 726㎡が調査された。特に馬越遺跡からは漆紙付着土師器や墨書土器など平安時代の遺構、遺物が多量に検出された。



馬越遺跡遺構検出状況



馬越遺跡出土土器

編集後記

平成6年より文化財調査審議委員として加茂市民俗資料館にご指導、ご鞭撻下さいました関谷之治先生が、平成15年10月に永眠されました。

今日までのご厚情に心から感謝するとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

今年度、第11号発刊に際しては大変ご多忙中にもかかわらず長谷川昭一氏には玉稿を賜り厚く御礼申し上げます。今後一層のご理解・ご協力をお願いする次第です。